

要介護期のろう者が経験すること —介護経験のあるコーダの語りからの考察—

○ 佛教大学 池田倫子 (010218)

キーワード：ろう者 介護 コミュニケーション

1. 研究目的

要介護期にあるろう者は、聞こえないことと加齢・疾病・障害などの介護が必要な状況が交差することで、他の聴者とは異なる困難に直面する。そのため、その子どもであるコーダ (CODA, Children of Deaf Adults) は、聴者が一般的に経験する介護とは異なる経験をする。しかし、要介護期にあるろう者の困難及びコーダの経験については、ろう者やコーダが発信することはほとんどなく、社会からも関心を向けられてこなかった。よって、本研究では、介護経験のあるコーダの語りより、これまで明らかにされてこなかった要介護期のろう者の経験を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

本研究は、コーダとしての育ちがその後の人生に与える影響について明らかにすることを目的とする研究の一部として位置付くものである。本研究は、コーダのライフイベントの中でも、親子の距離が近づく要介護期に焦点を当て、聞こえない親の介護の経験のあるコーダに対してインタビューを実施した。

調査時期：2023年6月から8月

調査対象者の選定方法：当事者団体の中での呼びかけ、機縁法

調査内容：①生まれ育った家族及び現在の家族構成②子ども時代について③介護の経験について

調査対象者：介護中あるいは介護経験のあるコーダ7名

3. 倫理的配慮

本調査は、日本社会福祉学会研究倫理規程を遵守し、佛教大学「人を対象とする研究」倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号 2023-3-A）。調査対象者には、調査目的やデータの取り扱いなどについては、書面の提示及び口頭で説明し、同意を得ている。調査結果については、個人が特定されないように匿名化を行った。本報告に関連して開示すべきCOIはない。

4. 研究結果

本調査の結果、要介護期のろう者が経験することについて次のことが明らかになった。

(1) 状態像の複雑化

要介護期のろう者は、「聞こえない」だけではなく、高齢化や疾患の影響でその状態像は複

雑化する。そのため、従来の医療や介護では対応できない場合がある。

(2)意思疎通の困難さ

手話を主なコミュニケーション手段とする高齢のろう者は、音声や日本語での意思疎通に困難さがある。特に、本調査の対象者の親は、受けてきた教育歴の影響で、日本語の語彙力はそれほど高くはないため、手話や簡単な日本語に置き換えて伝える必要がある。

(3)支援機関の無知

ろう者は、社会において少数派であるため、高齢者が利用する介護事業所、医療機関などの支援機関にその存在を十分に知られていない。そのため、職員らはろう者と接した経験が乏しく、老人性難聴と混同したり、筆談をすれば十分に通じるだろうという誤解をしていることもある。そのため、ろう者は支援機関の理解不足から適切な対応を受けられない場合がある。

(4)社会資源の不足

ろう者と聴者の間のコミュニケーションの障壁や、ろう者の社会的背景の理解が広まっていないことなどから、ろう者に対応できる社会資源は限られる。

5. 考 察

本調査で明らかになった要介護期のろう者が経験する困難の要因の一つに、高齢ろう者が受けてきた教育歴がある。優生思想を根底に持つ口話教育の影響で、手話を教育課程で学ぶことができなかったことや、聞こえないことや手話に対する否定的な考えをろう者自身が持つようになった。それだけではなく、口話の訓練に時間を割かねばならず、手話で学ぶことができなかったろう児たちは、マジョリティ社会で生きていくために必要な日本語の力を身につけることができなかった。ろう児たちは成長し、ろう学校高等部で理容や印刷などの技術を身につけたことで、限定された職種であるが、多くのろう者は自立し、家庭を持って暮らしてきた。仕事の範囲であれば、必要とされる日本語の範囲は限定されていたために大きく困ることはなかったと考えられる。しかし、加齢や疾病に伴う介護が必要な時期に差し掛かり、介護や医療、福祉といった聴者の社会の仕組みを利用せざるを得なくなると状況は変わる。日本語が基盤にある仕組みは、たとえ手話通訳を介して説明されたとしても、多くの高齢のろう者は聴者と同程度に理解することは難しい。そのため、要介護期のろう者の多くは、サービスを利用するに当たり、多くの困難に直面する。しかし、社会は要介護期のろう者を想定した仕組みを整備してこなかったため、その子どもであるコーダが介護を担うことになる。そのため、聞こえない親の介護の必要性が高まるほど、それを支えるコーダの負担が荷重になることを示唆している。